若山牧水全集

第五卷

若山牧水全集

雄鶏社刊

若山牧水全集　第五卷

昭和三十三年八月三十日發行

著者若山牧水發行者武内俊三印刷者草刈親雄印刷製本所東京都新宿區市ケ谷臺町一番地中央製本印刷株式會社發行所東京都中央區日本橋江戸橋一丁目七番地株式會社雄鷄社電話千代田(27)二七九一～二番振替東京二六二五五番

定價六〇〇圓

落丁、亂丁の際はお取換えいたします。

編集・校訂　若山喜志子　大悟法利雄

目次

旅とふる郷

第一編

山の變死人……五
空想者の手紙……一三
曇り日の座談……一八

第二編

林間の燒肉……二五
鹿……三〇
火山の麓……三三

雪と淋しき人々……四一

第三編

山より妻へ……五三
野州行……五六
御牧が原……五九
春日の湯……六八
山湯日記……七四

第四編

椿……七七
河豚……七九
青める岫……八三
鷹……八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

砂丘の蔭……八七
浪と蛸とヂンの酒……九四
岬の端……一〇四
秋亂題……一一四

第五編

旅の歌……一二五

海より山より

上編

浴泉記……一五三
北國紀行……一七六
南信紀行……一八五

鹽釜行……一九五
津輕野……二〇一
松島村……二〇九
板留温泉……二二四
板留より……二二八
その後……二三七
旅から歸つて……二三七

中編

燈臺守……二四三
裾野……二六七

下編

元旦記……三〇六

線路のそば……三二三
春の一日……三二一
廻り網……三二六
夏の花……三三〇
夏の鳥……三三二
ダリアの花……三三五
物置の二階……三三八
屋根の草……三四四
立秋雑記……三五一
私と酒……三五六

比叡と熊野

上巻

旅日記……三七一
比叡山……三八一
山寺……三九二
旅の或る日……四〇三
熊野奈智山……四〇八

下巻

おもひでの記……四三一
秋草の原……四六七
或る日曜の朝……四七一
山上湖へ……四七九
解説……大悟法利雄……四九七

第五卷

紀行・隨筆 一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

旅とふる郷

第一編

山の變死人

東京にて、R——君へ。

昨夜、と云つても今朝の三時近くだ。床に入つたが、睡れないので、まだ灯を點けたまゝ雨漏で煤け切つた天井に洋燈の火さきのうす赤く搖曳するのをぼんやり眺めてゐた。僕の留守中は殆んど物置見たやうになつてゐるガラン洞な古い大きな二階へ、此頃は毎晩僕一人睡ることになつてゐる。其處へ、惶しい勢ひで下の大戸を叩く音が起つた。母がやがて起きて行つて何か應待してゐる。田舍者の癖で、而かも急きこんでゐるから一層高調子だ。首縊りがあつたから直ぐ來て呉れと云ふのだ。久しく睡着かれないで神經が昂奮し易くなつてゐるところだつたので、それを聞くとひとしく僕の動悸は急に烈しくなつた。まるでその變事が我等に關係ある如くにまで思

はれた。聞耳立てゝ事情をくはしく知らうと力めたが、それからはひそ〳〵話になつて、一向解らない。すると、やがてして階子段口の襖があいた。愈々たゞ事ならず驚いてゐると、提灯をさきにして父が顏だけ此方に見せながら、

『首縊りがあつたげな、行て見んか。』

『行かう！』

言下に跳ね起きて、父のあとについた。

家を出ると、冷たい月の夜だ。

山が漆のやうに黑く、山と山との間を流れ下る長い溪の瀨が凍つたやうに白く輝いて居る。

『今夜あたり、霜でも降りさうだな。』

父はまろく肩をつぼめて小刻みに急いでゐる。死んだ男の名などを聞いても何年振りかに村に歸つて來た身には一向誰ともわからない。理由は、父を迎へに來た兩個の若者も知らんと言ふ。

一番鷄の啼くのが、月光の底から平たく慄へて響いて來る。

墓家が四軒か集つてゐる部落の一番西の端の家に男は縊つてゐた。家の上は椎の樹山で屋根の半分はその蔭で眞黑だ。庭の方にのみ月が際立つて明るい。その月光のなかに十人ほどの人數が一團りになつて何やら呟いてゐる。見ると、丁度家の出入口の軒さきに、ブラリと下つてゐる。

巡査も來てゐた。巡査と、醫者である父との指圖で、尻ごみをする若い者を叱りつけて、それを庭の眞中に持つて來て轉がした。着物をば漸く腰の端に纏ひ着かせたぎりの双肌ぬぎで、頭をば青々と剃つて居る。月光と松明の明りとで凍てたやうになつてゐるその顏をよく見ると、何處やら見覺えがあるので、先刻聞いた名前を思ひ合せて見ると、漸く解つた。博勞をしてゐた男で、名代の醉漢であつた。

迫々遠近の部落のものが集つて來てよほど賑かになつた。そして、高い笑聲も起つた。この家に年ごろの娘がゐて、それが情人の所へ夜遊びに行き、歸つて來て戸口を入らうとすると、ひよいとこのブラリを發見して腰を拔かしてしまひ、庭中這ひ廻つたのださうだ。その娘の兄と、この博勞と宵のくちに喧嘩をして、博勞も喧嘩强い男ではあつたが血氣盛りの者には敵せずに散々に打ちすゑられた。

『今夜、汝が家に行て首を縊るけ、さう思ふとれ！』

と地に倒れて泣き乍ら罵つてゐたのださうだ。そして果して約束を遂げたのであつた。

『此う、どうし置こか。』

檢視もすんで、誰かゞ屍體を指しながら斯う言つた。

『近けぢアねえか、彼處に置いちよけ、蓆でも被せち。』

一人が椎の樹山を振返つてさう言つた。其處は、墓場だ。

歸る路は僕が提灯を持つて、父と兩人であつた。

『今夜はこりア初霜が降りるぞ。』

年老つた父は同じ様なことを繰返しながら僕のあとに小刻みについて來た。

もう一つは、十日程前の暴風雨の時だ。雨が烈しくて、瞬くうちにこの峽間の村を貫いてゐる溪が三四丈も增水して、田も畑もあつたものでなかつた。僕の家の下などは、忽ち十間四方位ゐの巨大な渦卷きの淵となつて、まだ壞れぬまゝの家などがくる〳〵と廻つて流れて來たりした。馬の流れるのも見えた。斯んな風なら屹度死人もあつたらうと言つてゐると、果してあつた。家財だけでも流すまいとして溺れ込んだのが二人、一人はわれからこの濁流のなかに跳び込んだのださうだ。それから毎日、各部落から人が出てこの溪から下の大河筋、遠くその海岸あたりまで三個の屍體を探すべく、幾組も〳〵彷徨してゐた。そして漸く發見したのが、自分から跳び込んだといふ女一個であつた。齡は二十六歳で、妊娠中であつたさうだ。しかもこの前の洪水の時にはその妹が同じく跳び込んで死んだのださうだ。

その女の家の祖父に當る人とかゞ、その父を青孟宗竹で手足を縛つたまゝ山に棄てゝおいて殺

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo